

P1-64 体外受精児の出生体重の推移に関する検討

虎の門病院

東梅久子, 須藤なほみ, 小笠原加奈子, 高本真弥, 山口 隆, 水口剛雄, 古屋 智, 横尾郁子, 伊豆田誠人, 北川浩明

【目的】近年やせの女性の増加と出生児の低体重化が、将来的なメタボリック症候群との関連を含めて問題になっている。今回、当科における体外受精児の出生体重の推移を検討した。【方法】当科で施行した体外受精・胚移植にて妊娠し、妊娠37週以降に分娩した単胎のうち、1991年から1995年までの69例(A群)と、2000年から2005年までの57例(B群)を対象とし、両群における母体の非妊時のBMI、妊娠中の増加体重、児の出生体重との関連を検討した。【成績】1) 平均年齢はA群 34.7 ± 4 才, B群 36.1 ± 4 才で両群間に有意差はなかった。非妊時のBMIはA群 20.8 ± 2 , B群 20.5 ± 3 であり両群間に差はなかった。「やせ」はA群10例(16%), B群13例(25%)であり、B群において「やせ」が多い傾向がみられた。2) 平均出生体重はA群 $2,950 \pm 378$ g, B群 $2,856 \pm 524$ gであり、両群間に有意差はなかった。SFDはA群3例(4.3%), B群8例(14.0%)であり、B群において多い傾向がみられた。3) 非妊時のBMIおよび母体年齢と出生体重は両群とも相関はみられなかった。4) 妊娠中の体重増加はA群で 8.2 ± 3 kg, B群は 8.2 ± 3 kgであり、両群間に有意差はみられなかった。SFD児における母体の妊娠中の体重増加はA群 10.5 ± 2 kg, B群 6.9 ± 3 kgであり、B群において妊娠中の体重の増加が有意に少なかった。【結論】過去10年間に体外受精児の平均出生体重には変化がみられないものの、SFD児が増加している傾向がみられた。母体の非妊時のBMIとSFDとの関連はみられず、妊娠中の体重増加と関連している可能性が示唆された。【結論】体外受精児においても出生児の低体重化がみられることから、自然妊娠と同様に妊娠中の適切な体重管理が必要であると考えられる。

P1-65 母体姿勢と子宮内胎児姿勢との関連川崎医大¹, 大阪大²潮田至央¹, 松尾高司², 潮田まり子¹, 宋 美玄¹, 吉田 晋¹, 木村 正², 下屋浩一郎¹

【目的】妊娠後期において頭位を呈する胎児の三分の二が第一頭位(left occiput position)である事が知られている。しかしながら、妊娠中の母体と胎児の姿勢についての生理はほとんど解っていない。我々は胎児の第一頭位姿勢が母体姿勢と関係すると仮定し、妊娠後期の母体姿勢と子宮内胎児姿勢の関連について調査を行った。【方法】2005年7月から2006年2月までの間、単胎頭位経陰分娩となった低リスク妊産婦166人を対象に前向きコホート調査を行った。まず妊娠後半期に睡眠時にどのような体勢を好むかをアンケート用紙にて調査し、分娩後に胎位胎向を記入した。【成績】評価可能症例全160例中81例(50.6%)が妊娠後期に左側臥位を好むことが明らかになった。対して70例(43.8%)が右側臥位を好むと回答した。胎児については評価可能であった149例中77例(51.7%)が子宮内にて第一頭位をとっており、対して72例(48.3%)が第二頭位をとっていた。母体姿勢と胎児姿勢の組み合わせでは母体が左側臥位で胎児が第一頭位の組み合わせが最も多く41例(27.5%)となった。しかしながら母体姿勢と子宮内胎児姿勢の間には統計学的に関連は認められなかった。【結論】妊産婦の多くは左側臥位を好み、子宮内の胎児の多くは第一頭位をとることが認められたが、今回の調査では両者にあきらかな関連は認められないことが示唆された。

P1-66 臨床的に把握される自然流産の統計的観察

阪南中央病院

楠本裕紀, 佐道正彦, 片山美穂, 北田衣代, 山根誠一, 加藤治子

【目的】自然流産は全妊娠の中で10数%を占めるといわれているが、その正確な頻度を示すデータはほとんどない。当院の臨床統計によって全出産に対する自然流産の比率を示し、その傾向を観察する。【方法】地域の総合病院である当院では1977年からHCGまたは超音波検査により妊娠が診断された妊婦全員を管理カードに登録し、その妊娠結果を統計化してきた。それをもとに自然流産(妊娠22週未満子宮内妊娠)数の出産総数に対する比率の変化と、最近5年間の流産例の特徴を観察した。【成績】1977年～1995年の当院での出産総数12,912に対して、流産総数は1,492であった(11.6%)。その間の対出産流産比率の変化は1977年～1985年11.4%, 1986年～1990年10.1%, 1991年～1995年12.9%である。2003年～2007年の流産総数は365で、対出産流産比率は14%強に増加している。この5年間の流産事例の流産時妊娠週数、胎嚢の有無、胎児心拍の有無、妊婦年齢、経産回数、流産歴、就労状況などについて報告する。【結論】統計により観察した全出産数に対する臨床的に把握できた自然流産は12%である。最近増加傾向にあり2003年以降では14%強となっている。